

# 仲間という名の家族を得る

0ECH

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

外国から帰国した一人の少年。

再会した友人と新しい仲間とともに、立ちはだかる強敵を倒していく。

・タグは、進めながら増やしていきます

目

次

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

39 35 28 22 11 6 1



# 第一話

日本行きの飛行機の中、一人の少年が微笑みながら外の景色を見ていた。

レイ 「・・・あいつら、元気かな」

次の日 雷門中

校長 「君が転校生の神田レイ君だね？」

レイ 「はい」

校長 「手続きはもう終わっているから明日から普通に登校してくれ」

レイ 「はい」

校長 「今日はまだ時間がある、ゆっくり校内を見学していくてくれたまえ」

レイ 「わかりました、では」

レイは校長室を出た後、サッカーグラウンドへ向かった。

サッカーグラウンド

円堂 「よし!!」

染岡・豪炎寺 「『ドラゴントルネード』!!」

鬼道・一之瀬 「『ツインブースト』!!」

二つのシユート技が円堂と激突する瞬間、一人の少年が間に入り二つのシユートをそれぞれ片手で止めた。

円堂 「すっげえ!! 二つのシユートを止めるなんて、お前すごいキーパーだな!!」

アフロディ 「いや、私はキーパーではない。我がチームのキーパーはこんなもの指一本で止めるだろうね」

鬼道 「そのチームとは世宇子中のことだろう、アフロディ」

アフロディ 「円堂守君だね? 改めて自己紹介させてもらうよ。世宇子中のアフロディだ。君のことば影山総帥からきいている」

鬼道 「やはり、世宇子中には影山がいるのか」

染岡 「て、テメエ宣戦布告に来やがつたな!!」

アフロディ 「宣戦布告? · · フフ」

染岡 「何がおかしい!」

アフロディ 「宣戦布告というのは戦うためにする···私は君達と戦うつもりはない」

円堂 「!」

アフロディ 「君達は戦わない方がいい、それが君達のためだ」

一之瀬 「なぜだよ」

アフロディ 「なぜって……負けるからさ！」

円堂 「!!」

アフロディ 「神と人間が戦つても、勝敗はみえている」

一之瀬 「自分が神だとでも言うつもりかよ!!」

アフロディ 「さあ? どうだろうね……フフ」

円堂 「試合はやつてみなきやわからないぞ！」

アフロディ 「そうかな? りんごは木から落ちるだろう? 世の中には逆らえない事実というものがあるんだ。それはそこにいる鬼道有人君が一番よく知っている」

鬼道 「くつ」

アフロディ 「だから練習も止めたまえ、神と人間の間の溝は練習では埋められるものじやないよ。無駄なことさ」

円堂 「うるさい! 練習が無駄だなんて誰にも言わせない! 練習はおにぎりだ! 倭達の血となり肉となるんだ!!」

アフロディ 「ああ、あつはははは。うまいこと言うねえ。なるほど、練習はおにぎりか。フフフ」

円堂 「笑うどこじゃないぞ!!」

アフロディ 「しようがないなあ、じゃあそれが無駄なことだと証明してあげるよ!!」

アフロディはボール上に蹴り飛ばし、一瞬でボールに近づいた。

染岡 「い、いつの間に!?」

アフロディは円堂に向かつてボールを軽く蹴つた。

円堂 「うおおおお!!」

円堂はボールを止めようとするが簡単に吹き飛ばされた。

鬼道・豪炎寺 「円堂!!」

鬼道 「大丈夫か!!」

染岡 「円堂!!」

鬼道 「おい、円堂」

円堂 「う、うう」

夏未 「しつかりしなさい!!」

秋 「円堂君!!」

円堂 「どけよ!!」

アフロディ 「・・・」

円堂 「こいよ!! もう一発!! 今の本気じゃないだろ!! 本気でドンとこいよ!!」

アフロディ 「・・・あつはははは、面白い・・・神のボールをカットしたのは君が初

めてだ。決勝が少し楽しみになつたよ」

アフロディはそう言うとどこかへ消えていった。

一之瀬 「なんて奴だ」

鬼道 「世宇子中はあいつみたい奴らばかりなんだ」

豪炎寺 「決勝戦・・とんでもないことになりそうだな」

円堂 「つはあ」

レイ 「手、いる?」

円堂 「えつ?ああサンキュ」

鬼道 「大丈夫か?」

円堂 「ああ。今のボールで新しい技が見えたようなきがするぜ。やれるよ俺達」

響木 「いや、今のお前達には絶対に不可能だ!!」

## 第二話

次の日 イナビカリ修練場

円堂 「ハアハアハア（何が絶対に不可能だ、そんなことあるもんか！）”マジン・ザ・ハンド”絶対に完成させてやる）」

円堂は修練場で新しい必殺技の特訓をしていた。

全員 「合宿？」

響木 「ああ、学校に泊まつて皆でメシでも作つてな」

円堂 「・・え？」

夏未 「許可は私がとつておきました」

円堂 「待つてください監督。世宇子との試合は明後日なんですよ？それまでに”マジン・ザ・ハンド”を完成させないと・・」

響木 「できるのか？」

円堂 「えつ？」

響木 「今の練習で必殺技を完成させることが」

円堂 「そ、それはやつてみないと・・・」

響木 「無理だ!!」

円堂 「無理!!?」

殺技。闇雲に練習して完成するほど甘い技ではない」

円堂 「つ！」

響木 「それに、今のお前は必殺技のことで頭が凝り固まっている。そんな状態で完成させることは不可能だ」

円堂 「・・・」

鬼道 「・・確かに、一度『マジン・ザ・ハンド』のことを忘れてみるともいいかもしないな」

円堂 「え」

一之瀬 「俺も賛成だな。アメリカでも言うしさ『ゴキブリ』を捕る時以外は急ぐな』つて」

秋 「ゴキブリ? それって『ノミを捕る時以外は急ぐな』じゃなかつた?」

一之瀬 「え?・・そ、そうとも言うよね」

夏未 「それじや、合宿ということで決まりね」

響木 「皆用意をして五時に集合だ」

半田 「そういうえば監督、昨日の彼はどうしたんですか？」

響木 「彼には合宿のことは話してある。その時に自己紹介するそうだ」

鬼道 「・・・あいつか」

壁山 「結局あの後、すぐ帰っちゃいましたよね」

午後五時 雷門中

円堂 「ハア・・・合宿か。監督も何考えてんだか・・・」

秋 「ちよつと皆止めなさいってば!!」

円堂 「ん?」

そこでは、一年生組（音無・栗松・壁山・少林寺）が枕投げをして遊んでいた。

半田 「宍戸、お前枕なんて持つてきたのか？」

宍戸 「俺、これが無いと寝られないんです。ほら触つてみてくださいよ。最近流行りの低反発枕」

半田 「低反発?・・・お?なんかイイ感じじゃん」

雷門中イレブンは体育館の中でそれぞれ普通にくつろいでいた。

円堂 「お前ら……何しに来たんだ……」  
響木 「全員集合!!」

響木 「今日からこの雷門中サツカー部に入部の神田だ」

レイ 「二年の神田レイです。」

円堂 「俺は円堂守、このチームのキャプテンだ。よろしくな

レイ 「こちらこそよろしく」

一之瀬 「すいません、遅刻しました!!」

レイ 「……えつ!?」

一之瀬 「……あつ」

レイ 「……一哉?」

一之瀬 「やつぱりレイだ!!久しぶり!!」

レイ 「うん久しぶり……でも何で日本に?」

一之瀬 「ちょっと色々あつてね……」

秋 「そんな……本当にレイ君?」

レイ 「うん、やつと気づいてくれたね」

土門 「マジかよ……」

円堂 「なあ、一体どういうことなんだ?」

一之瀬 「レイは俺達三人がアメリカで過ごしていいた時の友達さ」

土門 「すごくサッカーがうまいんだぜ、な?」

秋 「うん、一之瀬君と土門君の二人を相手にしても勝てちゃうんだもの」

円堂 「すっげえ!!お前、本当に入部してくれるのか?」

レイ 「もちろんだよ。あと僕のことはレイって呼んでね」

鬼道 「ポジションは?」

レイ 「基本はM FだけどG K以外ならどこでもOKだよ」

### 第三話

その後、響木監督の友人で元雷門中OBのメンバー達も合宿に参加した。

円堂 「マジン・ザ・ハンド養成マシン？」

レイ 「そんなものがあつたんだ…」

会田 「マジン・ザ・ハンド」で大切なのは、へそと尻の使い方。それを習得するのに皆で作つてみたんだ」

マスター 「思い出すなあ、合宿だつて毎晩会田の家に集まつて…」

半田 「で、完成したんですか？」

備流田 「イヤ、駄目だつた」

半田 「駄目…だつたんですか」

マスター 「おいしいとこまではいつたんだがな！」

秋 「つてことは、このマシンを使えばもしかしたら…」

円堂 「!!」

一之瀬 「円堂！」

円堂 「ああ、早速やつてみようぜ」

「これを使っても完成させる保証はないぞ」

響木  
円堂  
「はい」

響木  
「・・・・・いいだろう」

円堂  
「おつと」

響木  
「もつとへそに力をいれるんだ！」

円堂  
「はい！・・・うわ!!」

響木  
「もう一度!!」

数十分後、円堂はようやくマシンを攻略できた。

秋  
「やった!!」

響木  
「よし、次のステップだ！」

円堂達は修練場内のグラウンドへ移動した。

響木  
「いいな円堂、さっきの感じを忘れるな」

円堂  
「はい！」

鬼道  
「いくぞ!!」

『イナズマブレイク』!!

円堂 「『マジン・ザ・ハンド』!! (なんなんだ? このパワーは・・体が燃えるみたいだぜ)」

一之瀬 「やつたか?」

しかし、円堂はシユートを止めきれず、吹き飛ばされてしまう。

土門 「おいしい! もうちょっとだつたのによ」

響木 「もう一度!!」

円堂 「はい!」

鬼道 「『イナズマブレイク』!!」

円堂 「『マジン・ザ・ハンド』!!」

しかしまた失敗し、吹き飛ばされてしまう。

響木 「もう一度!!」

円堂 「はい!」

それから数回挑戦するが全て失敗だつた。

染岡 「くつ、やつぱり駄目か・・」

円堂 「くそつ、何でできないんだよ!」

鬼道 「・・・監督」

響木 「んんん、何かが欠けている。何かはわからないが、根本的な何かが・・・」

鬼道 「根本的な何か？」

響木 「やはり『マジン・ザ・ハンド』は大介さんにしかできない幻の必殺技なの  
か・・」

円堂 「えつ？」

染岡 「つてことはいくら特訓しても・・・」

一之瀬 「『マジン・ザ・ハンド』は完成しない・・・」

円堂 「爺ちゃんにしかできない・・幻の必殺技・・」

夏未 「・・・・」

秋 「ちよつと皆どうしたのよ、負けちゃつたみたいな顔して。まだ試合は始まつて  
もないのよ?」

壁山 「でも、相手のシユートが止められないんじや・・・」

秋 「だつたら点を取ればいいでしょ?」

染岡 「点を取る?」

秋 「10点取られれば11点、100点取られれば101点。そうすれば勝てる  
じゃない！」

レイ 「秋の言うとおり、点を取ればいいんだよ!」

染岡 「鬼道」

鬼道

「ああ、取つてやろうじゃないか101点！」

風丸

「俺達もやるぞ。奴らにシユートは打たせない！」

壁山

「俺もやるつすよ！」

栗松

「意地でも守つてみせるでやんす！」

土門

「ああ！」

風丸

「やろうぜ円堂！」

円堂

「皆・・」

レイ

「僕も力を貸すよ！」

円堂

「レイ・・・よし！俺達の底力、あいつらに見せてやろうぜ!!」

全員

「おお〜〜!!」

円堂

「(戦える。皆と一緒になら・・)」

一之瀬

「お〜い、レイ〜！」

レイ

「どうしたの？一哉」

一之瀬

「久しぶりに勝負しないか？」

レイ

「え？」

鬼道 「俺も神田の実力を知りたいな」

豪炎寺 「俺もだ」

レイ 「三人まで・・・」

一之瀬 「やろうぜレイ」

レイ 「・・・・わかつたよ」

一之瀬 「いくよ!!」

レイ 「いつでもいいよ」

一之瀬がドリブルでレイに近づく。

一之瀬 「(ここだ!!)

一之瀬がレイをかわそうとするが・・・

レイ 「(・・・・・遅い)」

一之瀬 「なにつ!!」

レイは一之瀬以上の素早い動きでボールを奪い取った。

一之瀬 「また捕られちやつたな」

レイ 「でも一哉の動き、前より良くなつてる。」

一之瀬 「本当に?」

レイ 「うん」

鬼道 「・・・・・ 豪炎寺、見えたか?」

豪炎寺 「イヤ・・・・見えなかつた」

円堂 「ん? お前ら何してるんだ?」

鬼道 「円堂・・・今、レイと一之瀬が勝負してたんだが・・・」

円堂 「一之瀬とレイが?」

豪炎寺 「ああ」

円堂 「ふーん・・で、どうなつたんだ?」

一之瀬 「レイの勝ちだよ」

円堂 「へへ、やつぱレイつてすごいんだな!」

鬼道 「円堂こそ何でここに?」

円堂 「えつ?・・ああ、ちよつとレイと勝負したくてさ」

レイ 「僕ど?」

円堂 「ああ、お前のシユートを俺に見せてほしいんだ」

レイ 「・・・・別にいいけど、怪我しても知らないよ?」

円堂 「大丈夫だつて、一回だけだからさ、な?」

レイ 「わかつた」

円堂 「よし！来い!!」

レイ 「行くよ！」

レイは少し深呼吸した後、空中に飛び上がった。

円堂 「!!」

レイ 「行くよ・・・”天叢雲剣”!!」

円堂 「!!”ゴッドハンド”!!」

レイの放ったシュートは円堂の技を一瞬で貫き、ゴールに突き刺さった。

鬼道 「・・・・・!!」

豪炎寺 「・・・・・!!」

一之瀬 「・・・・・完成してたんだ・・・」

円堂 「・・・・・すげえ・・・すげえよレイ!!お前、こんなすごいシュート打てるんだ

な!!」

レイ 「あ、ありがとう」

鬼道 「豪炎寺、どう思う？」

豪炎寺 「あいつを中心にして攻めれば、世宇子から点を取れるかもしねない」

鬼道 「そうだな」

円堂 「なあ一之瀬、お前もあのシユート知らなかつたのか？」

一之瀬 「うん、あの時はまだ完成してなかつたんだ」

鬼道 「おい神田、今までどこでプレイしてたんだ？俺はお前のような選手は聞いたことがない」

レイ 「それは・・・・・一哉、話した方がいいかな？」

一之瀬 「うん」

円堂 「どうしたんだ？」

レイ 「僕は、最近まである国でプレイしてたんだ」

鬼道 「ある国とは？」

レイ 「コトアール共和国っていうアフリカにある国だよ」

一之瀬 「レイはアメリカで俺達と一緒に暮らしてた時に、俺より前に事故に遭つてさ」

円堂 「そうだつたのか」

レイ 「ちよつと訳ありでね。その時死んだことにしてコトアールに移動したんだ」

円堂 「訳つて？」

レイ 「ごめん、今は言えない」

円堂 「そつか」

鬼道 「それで？」

レイ 「ゆっくり確実に回復させるために家族で引っ越ししたんだよ」

豪炎寺 「じゃあその身体能力は・・・」

レイ 「うん、コトアールで強くなるために色々な練習法を自分で考えたんだ。これはその結果」

円堂 「すげえ・・・」

レイ 「とにかく明日の決勝戦、僕も本気で戦うからよろしく」

円堂 「ああ、よろしくな！」

次の日

円堂 「これは・・・」

決勝が行われるはずのフロンティアスタジアムが閉鎖されていた。

一之瀬 「誰もいないぞ」

円堂 「どうなつてるんだ？」

その時、夏未の持つている携帯が鳴った。

夏未 「はい、そうです……え? どういうことですか? ……でも今更そんな……  
はい・・はい、わかりました」

円堂 「誰からだ?」

夏未 「大会本部から、急遽決勝戦の会場が変わったって……」

円堂 「変わった? 変わったってどこに?」

夏未 「それが・・・・」

土門 「何だあれ!?

夏未が説明する前に、フロンティアスタジアムの上空からそれ以上に大きなスタジアムがあらわれた。

鬼道 「まさか・・決勝戦のスタジアムというのは・・・」

夏未 「ええ」

円堂 「あそこが!!」

## 第四話

円堂達は謎のスタジアムのグラウンドへ入つて行つた。

円堂 「ここが試合会場……」

夏未 「決勝当日になつて世宇子スタジアムに変更、影山の圧力ね……どういうつも  
りかしら……」

円堂 「……！」

円堂が何かを感じ、上を見ると影山が彼らを見下ろしていた。

円堂 「影山……」

響木 「……」

鬼道 「……」

豪炎寺 「……」

響木 「……円堂、話がある」

円堂 「はい」

響木 「大介さん、お前のおじいさんの死には影山が関わっているかも知れない」

全員 「！」

円堂 「じいちゃんが影山に!?」

響木 「ああ」

夏未 「響木監督!!なぜこんな時に!?」

「(決勝の前に選手の心を乱す監督は失格だ・・・しかしこれは今でなければ駄目なんだ。影山の陰謀で大会の決勝に出られなかつた俺達はショックから立ち直れず、運命を呪い、恨み、そしてサッカーから離れてしまつた。だがそれは間違いだつた。恨みに囚われたせいでサッカーという大事なものを失つてしまつたからだ。もし影山への恨みでサッカーをしようと言うのであれば、俺はこの場で監督を辞め、試合を棄権する。大好きなサッカーをお前から奪わないとために)」

パニックになりそうな程動搖していた円堂だが、豪炎寺やチームメイトのおかげで上手く立ち直つた。

夏未 「円堂君・・・」

秋 「円堂君・・・」

円堂 「監督、皆、こんなに俺を思つてくれる仲間、皆に会えたのはサッカーのおかげなんだ。影山は憎い、けどそんな気持ちでプレイしたくない。サッカーは楽しくて、面白くて、ワクワクする・・最高のスポーツなんだ。だからこの試合もいつもの『俺達のサッカー』をする!皆と優勝を目指す!サッカーが好きだから!!」

全員 「・・・・・」

響木 「さあ試合の準備だ!!」

全員 「はい!!」

レイ 「（円堂大介は彼のおじいさんか・・・）」

数十分後、円堂達がグラウンドに行くと観客席は観客で溢れていた。

実況 「雷門中、四十年ぶりの出場でついにこの決勝戦まで上り詰めた!! 果たして  
フットボールフロンティアの優勝をもぎとることができるのでしようか!!」

円堂 「いよいよ始まるんだな、決勝が。 皆とこの場所に立てて信じられないくらい  
嬉しいよ！」

秋 「円堂君・・・」

円堂 「俺、このメンバーでサッカーをしてこれで本当によかつた。 皆が俺の力なん  
だ」

夏未 「絶望的な状況なのにあの笑顔・・・スゴイわね」

秋 「ええ」

夏未 「マジン・ザ・ハンドを身につけることができなくとも、世宇子中には自分の必  
殺技が通用しないってわかついていても、全然諦めていない」

秋 「うん、今までと同じ。今自分が出せる全てをぶつけて勝つつもりなの」

円堂 「さあ・まずはアップだ」

全員 「おお!!」

円堂 「(行つてくるぜ、じいちゃん・・・)・・・・!!?」

突如、スタジアム内に突風が吹き、世宇子中のメンバーが現れた。

実況 「この大会最も注目を集めている世宇子イレブンだ!!」

円堂 「・・・」

実況 「決勝戦まで圧倒的な強さで勝ち続けてきた大本命!!この決勝でもその力を見せ付けるのか!!」

豪炎寺 「世宇子中・・・」

実況 「さあ、まもなく試合開始です!!」

円堂 「いいか皆!!全力でぶつかればなんとかなる・・・勝とうぜ!!」

全員 「おお!!」

響木 「・・・ん?」

スタジアムの従業員が世宇子中のベンチにドリンクを持ってきた。

アフロディ 「僕達の勝利に」

アフロディの言葉と共に、世宇子イレブンが同時にドリンクを飲み干す。

世宇子スタジアム ???

影山 「決勝へ進んできたのが雷門とは、これも因縁か…だが、ある意味理想の相手かもしけん・・プロジェクト乙を達成するためのデータを得るためのな」

世宇子スタジアム 雷門ベンチ

響木 「神田、お前はベンチだ」

レイ 「…・・・はい」

鬼道 「!!何故ですか監督！」

一之瀬 「レイなら世宇子の動きについていけます!!」

響木 「・・・ベンチだ」

円堂 「大丈夫、監督には考えがあるんだよ」

レイ 「一哉、鬼道君、まず君達の力を見せてほしい」

鬼道 「・・・わかつた」

一之瀬 「みせてやるよ、レイ」

グラウンド

アフロディ 「警告したはずだ、棄権したほうがいいと」

円堂 「サッカーから、大好きなものから逃げるわけにはいかない」

アフロディ 「君ならそう言うと思っていたよ、円堂君」

実況 「いよいよフットボールフロンティア全国大会決勝、雷門中対世宇子中の試合が始まります!!」

円堂母 「見守っていて、お父さん」

実況 「さあ試合開始だあ!!」

## 第五話

世宇子中のキツクオフで試合が開始した。

世宇子イレブンがバスをまわし、アフロデイにボールが渡るが、一步も動こうとしない。

豪炎寺 「動かない？」

染岡 「舐めんな！」

アフロデイ 「君達の力はわかっている、僕には通用しないということもね……『ヘブンズタイム』！」

二人がアフロデイに迫った時、アフロデイは必殺技を使い一瞬で二人の背後に移動した。

染岡 「消えた！？・・・ああ！！」

豪炎寺 「いつの間に？・・・うわあ！！」

円堂 「何!?」

豪炎寺と染岡はアフロデイの必殺技が作り出した突風で吹き飛ばされてしまう。  
一之瀬 「見えなかつた・・・」

鬼道 「なんて速さだ！」

一之瀬と鬼道がアフロディを止めようとするが、

アフロディ 「・・・『ヘブンズタイム』」

アフロディは必殺技で瞬間移動し、

アフロディ 「僕達は、人間を超越した存在なんだ」

鬼道 「くつ!!」

一之瀬 「うわああ!!」

鬼道達も突風で吹き飛ばされてしまう。

春奈 「お兄ちゃん!!」

レイ 「一哉・・・!!」

ディフェンダーの二人、土門と壁山はアフロディのプレッシャーに萎縮してしまう。

アフロディ 「怯えることは恥じる必要はない。自分の実力以上の存在を前にした時には、当然の反応なんだ」

壁山 「うわあああ!!」

土門 「うわあ!!」

壁山と土門も吹き飛ばされ、残るは円堂とアフロディの一対一になつた。

円堂 「くつ、来い!!全力でお前を止めてみせる!!」

アフロディ 「天使の羽ばたきを聞いたことがあるかい？」

円堂 「何!?」

突然アフロディの背中に羽根が出現し、アフロディはそのまま空中へ飛び上がった。

アフロディ 「『ゴッドノウズ』これが神の力!!」

円堂 「『ゴッドハンド』!!」

円堂はアフロディのシユートに対し、今の自分の最高の技で対抗するが、

アフロディ 「本当の神はどちらかな?」

円堂 「え・・・ぐわあああ!!」

簡単に破られ、ボールに吹き飛ばされてしまう。

円堂母 「守!!」

実況 「恐るべきシユート『ゴッドノウズ』が雷門ゴールに炸裂！ 世宇子中先制！」

豪炎寺 「ゴッドハンドが・・・」

鬼道 「やはり、通じないのか・・・」

円堂 「・・・くつ」

アフロディ 「わかつたかい？ これが君が愚かにも勝とうとしていた相手の実力

だ」

風丸 「円堂!!」

円堂 「ああ、大丈夫だ」

しかし円堂の利き手のグローブは既にボロボロなつてしまっていた。

風丸 「円堂！・たつた一度のシュートで・・・」

円堂 「ああ、すごいシュートだつた・・・でも次は止めてみせる!!」

一之瀬 「よし皆、今度はこっちの番だ。取られた分、取り返そうぜ！」

風丸 「点を取るぞ!!」

全員 「おおう!!」

デメテル 「諦めの悪い連中だな」

アフロディ 「彼ららしいよ」

点を取られた雷門からのキックオフで試合が再会するが、世宇子イレブンは全く動かなかつた。

染岡 「舐めやがつて！『ドラゴン』・・・」

豪炎寺 「『トルネード』!!」

そのままゴールに近づいた二人は合体シュート技を放つが、

ポセイドン 「『ツナミウォール』！」

世宇子中キー・バーの必殺技に破られてしまう。

染岡 『『ドラゴントルネード』が・・・』

円堂 「なんて奴だ・・・」

鬼道 「ありえない・・・！」

簡単にシユートを止めたポセイドンはそのボールを豪炎寺に渡し、挑発する。

鬼道 「・・・ボールを渡したことが失敗だと思い知らせてやる」

豪炎寺 「・・・・・」

豪炎寺は領き、一之瀬を含めた三人はシユート体勢にはいる。

鬼道 「『皇帝ペングイン』・・・」

一之瀬・豪炎寺 『『2号』!!』

三人は雷門の中でトップクラスのシユートを放つが、

ポセイドン 「ツナミウオール！」

ポセイドンは難なく三人の必殺シユートを止め、止めたボールを一之瀬に渡す。

一之瀬 「なら、これでどうだ!! 『ザ・フェニックス』!!」

円堂と土門が前線まであがり、三人で必殺シユートを放つが、

ポセイドン 『ギガントウォール』!!・・・これじや、ウォーミングアップにもな

らないな」

ポセイドンは別の技で簡単に止めてしまった。

一之瀬 「俺達の必殺技がどれも通用しない！」

響木 「くっ!!」

世宇子イレブンがパスを廻し、ボールはデメテルへ。

風丸 「ゴールへは近づかせない！」

少林寺 「キヤプテンだけじゃない！」

壁山 「俺達皆で守るつす！」

デイフェンダーの三人がデメテルを止めようとするが、

デメテル 「『ダツシユストーム』!!」

風・少・壁 「「うわあああ!!!」」

円堂 「壁山!!風丸!!少林!!」

三人共、デメテルの必殺技で吹き飛ばされる。

デメテル 「うおおお!!『リフレクトバスター』!!」

円堂 「『ゴッドハンド』!!・・・!!」

円堂の『ゴッドハンド』はデメテルのシユートにいとも簡単に破られ、追加点を許してしまった。

円堂 「くつ・・・少林!!」

少林寺はデメテルに吹き飛ばされた時に足を負傷してしまい、そのまま半田と交代した。

半田 「お前の分も戦つてくる！」

少林寺 「お、お願ひします」

しかしその後も雷門・イレブンは世宇子・イレブンのプレーに太刀打ちできず、栗松・松野・染岡・目金が負傷し、響木監督はレイを出すことはなく、雷門は十人で戦い続けた。

## 第六話

「円堂!!」

後半に入つてからも十人で戦つていた雷門だが、ついに円堂が倒れてしまう。

「ねえレイ君、何で試合に出ないの?」

我慢の限界なのか木野が神田に聞いた。

「・・・待つてるんだよ」

「待つてるって一体何を?」

「雷門の覚醒さ・・・」

木野達マネージャー陣には、神田の言つてる意味がわからなかつた。

一方試合は、世宇子中の猛攻に雷門のメンバーが全員倒されていた。が、円堂の熱意に押され何回も立ち上がる。

「(何だ?・・この感覚は?・・・まさか神である僕が怯えている!?)

アフロディも円堂の気迫に押されていく。

「・・・そんなはずはない!! „ゴッドノウズ“!!」

アフロディイが渾身の力をこめたシュートを放つ。

「次こそ止める！絶対に負けるもんか！！」

その瞬間、黄色のオーラが円堂を包んでいく。

「いくぜ！！』マジン・ザ・ハンド』！！』

円堂の新技はアフロディイのシュートをいとも簡単に止めた。

「・・・やった、ついに完成したんだ！！』

「円堂！！』

前方を見ると、鬼道と豪炎寺が相手ゴールに向かっていたので、円堂はボールを大きく前方へ投げた。

「いくぞ豪炎寺！」

「おう！」

「『ツインブーストF（ファイア）』！！』

二人の連携技が炸裂し世宇子中ゴールへ迫る。

「『ツナミウォール』！！』

世宇子キーパーのポセイドンが止めようとするも吹き飛ばされ、雷門が一点取り返しだ。

「選手交代！！・・・神田」

「はい」

点を取つたところで、響木監督は神田をだし、雷門はやつと十一人になつた。

「神田・・・」

「鬼道君、もうわかつたよね？僕が試合に出なかつた理由」

「ああ」

「ん？ どういうことだ？」

円堂や他のメンバーはまだわからないらしい

「・・・とにかくこの試合に勝つた後で話そう」

神田をフォワードにいれて試合が再会した。

試合が再会し、アフロディイがボールを運ぶと神田が立ちはだかる。

「君か・・・一回シユートを止めたぐらいで僕達に勝てるど？」

「悪いけど、まだ君は僕の領域に達していない」

「神を侮辱するか・・・”ヘブンズタ・・・!!”

「言つておくけど、その技・・・僕には通用しないよ」

アフロディイが技を発動するまえに、神田がボールを奪う。

「（まだ僕らのレベルには程遠いかな）・・・・いくよ」

そう呟くと、神田は一気に相手ディフェンダーを抜き去り、ゴール前でとまる。

『天叢雲剣』!!

神田の放った必殺シュートは、相手に技を出させる暇も与えずゴールに突き刺さつた。

その後も世宇子中は、パワーアップした雷門に手も足もでず、四対三で雷門が逆転勝利した。

## 第七話

「もう帰るのか？」

表彰式が終わった後、コトアールに帰るレイを見送るため一之瀬・土門・木野は空港に来ていた。

「うん でも三週間だけ戻つてまた日本に来るけどね」

「戻つて来るのか？」

「レイ君、本当にまた一緒にサッカーできるの？」

「もちろん、そのために帰つてきたからね」

その後、レイが土門・木野と別れを済ませると一之瀬がレイに近づいた。

「・・・・・」

「哉、どうしたの？」

「また、一緒にサッカーやろう」

「・・・うん」

一之瀬とレイは固い握手を別れた。

パリ行きの飛行機が出発するまで残り時間僅か。レイは電話していた。

「…………うん。監督に聞いてた通りだつたよ、彼は」

『そうか、アイツがワシの技を……』

『彼なら監督の読み通り……来るかもね』

『当然だ、ワシの孫だぞ？……あいつらには連絡しなくていいのか？』

「うん、驚かせたいから」

『取り敢えず、気をつけて帰つてこい』

「じゃ、数時間でそつちに着くから」

一之瀬達が別れを済ました頃、円堂達はキャラバンで先に学校に戻つていた。

「…………結局何でレイは途中まで出なかつたんだ？」

「……試合前日、神田が俺に頼んだ」

「監督に？」

「ああ・・・確かに神田が最初から試合に出れば、楽に勝てたかもしれない。しかしそれではお前達のレベルアップのチャンスが無くなってしまう」

「なるほど、そうなれば俺達は神田に頼り切つてしまい、試合に勝つことは逆に難しくなるということですね」

「そつか!!」

「現にアイツが加わった後も、お前達は神田の動きについていくことができた・・・」

「やつぱアイツ、スゲーな!!」

「おい、何だあれ?」

半田が示した方を見ると、三つの黒い物体が勢い良く雷門中へ落ち、校舎はバラバラに破壊されてしまう。

「!!すいません、急いでください!!」

円堂達は新たな敵との戦いに挑むことになる。

「二十時間後、無事コトアールに着いたレイだが、  
・・・ねえ、さすがにやりすぎだよ」

レイの目の前には、『お帰り!!』と書かれている巨大な板を二人で抱える両親がいた。

「いいじゃない、約二週間……ママ、寂しかったんだから!!」

「そうだぞレイ、ちゃんと連絡しろと言つておいたじゃないか」

「ハア～～…………ただいま」

「おかえりなさい」

その後、レイは両親と一旦別れ、街の外れにあるサッカーフラウンドへ来ていた。

グラウンドでは六人くらいの子供達がサッカーをしている。

「いくぞ！ ケーン！」

「来い！！ ドラゴー！」

ドラゴが放つシュートは止めようとしたケーン諸共、ゴールに押し込む。

ゴールキックで再スタートし、リューがボールを運ぶ。

「どっちが早いか勝負だ!!」

ワインディがデイフェンスに入り、ボールを奪い合う。

「くつ、ゴーシュ!!」

ボールを取られそうになつたりューは咄嗟にゴーシュにパスを出す。  
ゴーシュはフリーに。

「いくぜ、口ココ！」

炎の纏つたシユートが口ココにせまるが、

『“ゴツドハンド”!!』

口ココが完璧にキャッチする。

「いいシユートだ、ゴーシュ」

「口ココこそ、いいキャッチだ」

試合を見ていたレイは、何も言わずグラウンドに入り、ボールを蹴る。

「・・・・・」

「！ねえ、君も一緒にやろうよっ」

「・・・・・“天叢雲剣”」

『!!“ゴツドハンド”・・・何?』

『天叢雲剣』は口ココの『ゴツドハンド』を軽く弾き飛ばしゴールへ刺さった。

「このシユート・・・まさか、レイ?」

「久しぶり、皆すく上手になつたね」

「当然だろ!今度の大会で代表に選ばれるためだからな」

ゴーシュが得意気に胸を張る。

「そつか・・・」

「ん? どうしたんだレイ?」

「・・・何でもないよ。それより一緒に練・・・!!」

その時、どこからか強烈なボールがレイに向かつて飛んでくる。

「誰だ!!」

飛んできた方を見ると十一人の男達がこちらを見下ろしていた。